

音楽科の多面的アプローチから学びを深めるための研究

—子供たちの興味や気付きに視点を当てて—

横浜国立大学大学院 教育学研究科 修士課程 2年 南野 秀人

はじめに

本研究の目的は、現在求められている力のうち、児童・生徒（以下子供たち）が日々の学びの中から、学びのつながりや面白さに気付き、学びに向かう力をさらに高めるための提案である。変化の激しい現代において、これからを担う子供たちが、自ら学び、成長していくために必要な基礎的・基本的知識・技能の定着をしていく中で、その場の学習で終わらない、系統的で子供たちにとって実りある学びが必要である。

1. 現行¹の学習指導要領と次期²学習指導要領を踏まえて

現代の学校教育において、教員に求められることは非常に多く、音楽科でもその責任は大きい。そのことは学習指導要領からも読み取ることができ、現行の学習指導要領からは、目標の改善として、「音楽文化についての理解を深め」ることが規定されている。また、我が国の伝統的な歌唱の充実として歌唱教材選定の観点も示されており、鑑賞領域の改善としては、「言葉で説明する」、「根拠をもって批評する」などで音楽のよさや美しさを味わい、音楽の構造などを根拠として述べつつ、感じ取ったことや考えたことなどを言葉を用いて表す主体的な活動を重視され、〔共通事項〕の設置もされた。

次期学習指導要領では、これらをもとにしつつも、全教科の目標に各教科に即した「見方・考え方」という文言が盛り込まれ、より教科教育の専門性に重きが置かれているのではないであろうか。また、「音や音楽と自分との関わりを築いていけるよう、生活や社会の中の音や音楽の働き、音楽文化についての理解を深める学習の充実を図る」という文言もあり、地域の中にある学校としての役割を果たす、社会に開かれた学校づくりもより求められている。

そして、子供たちが「何ができるようになるか」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」の3点が基本的な大きな柱となり、これまで以上にカリキュラムマネジメントが必要である。加えて、松下（2016）は、中学生の心に残る音楽の授業の要件について「楽器を使った学習をたくさん取り入れた授業」「音楽についての知識や技能が身に付いたと実感できる授業」「子供が主体的、協働的に学習できる授業」の3つをあげ、その3つの中の主な子供の反応として「みんなで〇〇した」「勉強になった」「できるようになった」「楽しかったおもしろかった」「今も役立っている」「頑張った」「自分たちで〇〇した」「ふし

¹ 平成 20 年告示

² 平成 29 年告示

ぎ！」を図で表している。ここからも、子供たちが心に残る授業ということは、深い学びに向かっていると考えることができる。

そこで本研究では、カリキュラムマネジメントの一つとして、「社会に開かれた教育課程」の観点ももちながら、子供たちが自らの気付きや興味からさらなる学びへと進めていけるように、「学びのつながり・拡がり」についてまとめる。

本研究では、まず学びへのプロセスとして、「学校生活」とつながりのある学び・学習と「地域・社会」とつながりのある学び・学習に区分した。その中で「学校生活」とつながりのある学び・学習として「他教科との連携」に着目し、「地域・社会」とつながりのある学び・学習として「アウトリーチ（音楽演奏会）」に焦点を当てる。

それらの相互的で多面的なアプローチから、子供たちが学びの視野を広げ、音楽の学びがより深まるための提案を考え、述べていく。

2.学校内での学びのつながり・拡がり(他教科との連携から)

まず、学校内での学びのつながり・拡がりについて考えた際に、各授業の学びを支えるためにも、各教科と学校生活での経験をつなげた学びがとても重要であろう。先述の児童・生徒の「勉強になった」「できるようになった」「ふしぎ!」「今も役立っている」などの思いや気付きはとても大切である。その中で、日々の学びを深めるためにも、総合的な学習の時間があるのではないかと考える。しかし、総合的な学習が授業として創設された1998年から今年で20年となるが、現場の教員も授業内容や方法についてまだまだ試行錯誤している現状がある。また、総合的な学習の時間を学校行事の時間として使っている現状も少なくないであろう。

そのような現状の中で、日々変化する社会や子供たちを取り巻く生活環境を考慮し、「何かで学んだことが何かに活かされる」というプロセスを大切にする授業もより必要ではないだろうか。子供たちが学んでいく中で、次の学びに活かせるような興味や気付きを大切にし、学びの面白さやつながりに触れ、学びに向かう力を高めていく必要がある。

そこで、合科教育ではない、「他教科との連携」に着目したい。

人と人がかかわり合っていく中で、形態化したとされている音楽を、学校教育の時点で様々な人々や観点から捉えることはとても重要である。そして、音のない生活は考えられない現代において、情報機器などの発展とともに次から次へと音楽が生み出された。それに伴い子供たちも多くの楽曲に触れる機会が増えた反面、流れるように音楽を聞くような状況があり、音楽の在り方も変わってきている。そのため、学校教育において音楽の本質に近づくことも必要であると考え。その本質を伝えていくためにも、音楽科として教科の枠に捉われすぎない、他教科などとの連携がとても重要であることが考えられる。

小島（1998）は、音楽科と他教科とのかかわりに着目する理由について

「音楽科の存在基盤を確認するためにも、音楽科を他の教科との関連の中で見る必要があると答えない。そのものだけを見ていたのでは、かえって独自性は見えてこない」

「学校で音楽をすることの目的は、子どもの成長すなわち経験の発展に貢献するというところにある」とし、音楽がただ、知識・技能の習得や興味・関心を引き出すものではな

いことを述べた。加えて小島（1999）では、「地上の茎や花は、「芸術・文化」とも呼ばれるが、それは土台があってのものなのである。子どもが表現活動をする場合、その土台を作るのに、子どもの生活経験の肥料となる。また、茎が伸び育ち、花をつけるのに、他教科での経験やいくつかの表現媒体が関わるのが栄養となる。」と述べた。このような事からも一つの学びだけに終わらない汎用的で幅広い学びが重要であることがわかるとともに、音楽が、そのものだけで成り立っておらず、様々な経験のうちから表れるものであるということも改めて理解することができる。

ここで、具体的に他教科との連携をする際「各教科」を支えるプロセスとして「授業方法」「授業汎用的能力」「授業内容」を示したい。これは芳賀（2017）が示した分類を参考に筆者が再分類したもので、

「授業方法」：同じもしくは類似した環境、形態を用いる。

「授業内容」：同じもしくは類似した教材、題材を用いる。

「授業汎用的能力」：A教科を学び得た事柄からB教科にも興味をもった。もしくはB教科が好きになった。

である。

以上の3分類を他教科との連携の基本的な考えとし、本研究では、特に「授業汎用的能力」に規定される一つの学びがのちの学びに好影響を与えることに着目し、系統的で実りある、深い学びの提案を目指す。

「授業汎用的能力」に着目する理由として、上述にもあるように、様々なかかわりのある音楽を学び、得ていく上で、音楽科だけで知識や技能の習得をしてしまうことは、より豊かな感性の習得や表現活動の幅を狭めてしまうと考えるからである。そこで、「音楽科で学んだことが、他教科で生かされた」、もしくは「他教科とかかわりあっているということに気付くことができた」また、「他教科での学びが音楽に生かせることに気付くことができた」などの子供たちが自ら気付き、学びを深めていけることがとても重要なのではないかと思う。

先行研究では、国語科³や社会科⁴、道徳科⁵、図画工作・美術科⁶との連携が多くみられた。それら先行研究を踏まえ、東京都公立中学校において平成25年から27年に採択されていた、教科用図書・教師用指導書の年間指導計画より、具体的な題材や単元名から内容を把握し、想定される学びと学びのつながりを見出した。以下に具体的な想定される連携について示す。

○音楽科では、歌唱活動が計画上の半数を超えている。1年間を通して歌い方を学び、合唱、物語の表現ができるようになることまでに及ぶ。

³ 歌唱教材を用いる際に、歌詞の解釈やオノマトペなどの学習をするもの

⁴ 鑑賞教材などを用いる際に、歴史的背景や地理的背景などを学習するもの

⁵ 個人や集団の学習形態や感動するということを通して学習するもの

⁶ 鑑賞教材などを用いる際に、色や形などを用いて表現し往還的学習をするもの

○国語科では、「言葉に出会うために」や「豊かな言葉」、「表現を見つめる」等の単元から音楽の歌唱活動における歌詞の理解や表現の幅を文章から読み取り実際に表出すること等ができる。また、「いにしへの心にふれる」では日本の民謡や伝統音楽を通して伝統的な言語文化について相互理解することが期待できる。

○社会科では、地理分野で、世界と日本、そして地域へと枠を身近なものとし1年間を通して学んでいく。一方、歴史分野で、身近な地域の歴史についての学びを通し、日本の中世頃からの歴史を学ぶ。これらから音楽科の歌唱や鑑賞、創作と地理分野の世界や日本の情景、また歴史分野も織り交ぜて、地域素材等を生かすことができる。

○数学科では、「正の数・負の数」や「比例と反比例」の単元から音楽的要素を意識的に知覚することができるとともに、「平面図形」の単元では図形楽譜等と結び付けて、数学的思考で音楽上の特質について学ぶ機会をつくることができる。

○理科では、「身近な生物の観察(植物)」、「身近な物理現象(光・音・力)」の単元での学びを通して創作の題材として用いることができるとともに、鑑賞や、器楽においても具体的なイメージと具体的な原理を把握して取り組むことができる。

○外国語科では、「紹介」をしたり「説明」をしたりする単元を通して、音楽を言語化し意識的に触れることで、より音楽について理解が深まるとともに、創作ではその言語特有のアクセント等を用いて言葉に触れながら音楽の構造を知る機会をつくることができる。

○美術科では、「鑑賞」、「絵」、「デザイン」の題材での学びを通して鑑賞や創作、歌唱においても絵画や美術的作品で表現、もしくは関連した美術的作品と結び付け、影響し、されていることを理解することで、より深い興味と関心を得ることができるとともに、相互を通して芸術に対する興味関心をよりもつことができる。

○技術・家庭科では、「材料と設計の学習」や「制作と組み立て」等の単元の学習を通して、楽器や音素材の構造について理解し、音楽の緻密さを知ることができる。そして「作品紹介のページ作成」の単元では、日本の音楽に関するホームページを作成することにより、より深まった知識を得ることができる。また家庭科では、「わたしたちと家族・家庭と地域」の単元において、現代注目されている、学校・地域・家庭との連携を合唱コンクール等の文化的行事を通して、図ることができるとともに「幼児の生活と遊び」の単元においては、音遊びを自分たちで考えることで、音楽を容易に体感することができる。

○保健体育では、「体づくり運動」や保健分野(第1章1.からだの発育・発達、2.呼吸器・循環器の発育・発達、9.ストレスと心の発達、10.ストレスへの対処と心の健康)の単元の学習を通して、自らの心身の発達から変声期や無理のない発声を相互で理解するとともに、よりよく生きていくための音楽からのアプローチを知る。また、体育分野の各競技のフォームを歌唱や器楽に取り入れ、十分なパフォーマンスに生かすことができる。

このように、中学校音楽科の視点から他教科の題材や単元を、教科用図書・教師用指導書を用いて見つけることができる。音楽科で学ぶべきことと他教科で学んでいること、またこれから学ぶことがつながっていたり、相互に関連したりすることができる。このような学びを通して、子供たち自身が興味や関心をもち、多くの学びの楽しさに触れる機会が多くなる。そして、特定の教科に対する苦手意識を軽減させ、万遍ない学力、また学習意欲の向上をより期待することができる。しかし、関連付ける際の懸念点としては、教員が一方的に知識注入型の授業として、関連事項を教え込んだり、ノートに書かせてテストに出したりするのでは、せっかくの機会が台無しである。また、連携の主な手段が、本研究で定義した「授業方法」、「授業内容」に偏る可能性があることもある。その理由として「授業汎用的能力」では、子供たちの学びのつながりや拡がりを見取ることが大変難しいためであると考えるが、その見えない部分をどのように見取り、どのように可視化するかがこれからの課題でもある。

日々の授業の中で子供たち一人ひとりが気づき、自ら得ていき、発見してもらうよう教員は手立てや工夫がとても大切であり、その子供たちの「気づき」を大切にしたい。

3.学校外との学びのつながり・拡がり(アウトリーチ⁷演奏会から)

次に学校外との学びのつながり・拡がりについて考えた際に、「地域・社会」や「家庭」との連携がとても重要になってくる。中央教育審議会答申⁸では、

- ① 社会や世界の状況を幅広く視野に入れ、よりよい学校教育を通じてよりよい社会を創るという目標を持ち、教育課程を介してその目標を社会と共有していくこと。
- ② これからの社会を創り出していく子供たちが、社会や世界に向き合い関わり合い、自らの人生を切り拓いていくために求められる資質・能力とは何かを、教育課程において明確化し育てていくこと。
- ③ 教育課程の実施に当たって、地域の人的・物的資源を活用したり、放課後や土曜日等を活用した社会教育との連携を図ったりし、学校教育を学校内に閉じずに、その目指すところを社会と共有・連携しながら実現させること。

とあり、次期学習指導要領から今後さらなる地域・社会と学校の連携が求められている。

その中で、音楽科としては、芸術鑑賞教室や地域行事、お祭りへの参加や地元ならではの伝統音楽の学習、アウトリーチ演奏会など様々であるが、本研究では、アウトリーチ演奏会に着目し、カリキュラムマネジメントの礎としたい。

アウトリーチに関しても様々な研究があり、吉本(2013)で示されている調査では、アウトリーチがもたらす教育的効果として「①自身の回復, 自己肯定感 ②創造力, 想像力,

⁷ アウトリーチ (outreach) とは「手を伸ばすこと, 差し伸べること」、「パートナーシップ」などともいう 林(2013)

⁸ 平成28年12月21日告示 「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の 学習指導要領等の改善及び必要な方策等について (答申)」

批判的思考力 ③社会性, 協調性, グループワーク (の能力), 責任感 ④基礎学力の向上, 他の教科との連携」とあり、教育的意義があることがうかがえる。さらには、地域人材の活用やプロの演奏家などの活用から地域・社会とのつながりもできる。そして、学校の中だけでは経験することのできないことに触れる良い機会となるであろう。そこから、子供たちがそれまでに学んできた学びを整理したり、活かしたりすることでさらなる学びへと向かうことができると考える。

以下より筆者が現在携わっている認定 NPO 法人のアウトリーチ活動の、参与観察から具体例をあげ考察する。

まず本法人は、主に東京都内 2 区の公立小学校第 4 学年を対象に、年間 20 校程度のアウトリーチ活動を行っている。内容は、金管五重奏や弦楽四重奏、マリンバ、リコーダーアンサンブル、ピアノ、和楽器と様々である。その中から各学校の実態に合わせて、音楽科教員と相談の上実施内容を決めている。

今回この法人に参与観察依頼をした理由として、筆者が小学校時代に本法人のアウトリーチを受け、その後の学びに生かされた経験からである。その経験から本研究の趣旨と本法人の活動趣旨が合うのではないかと考えたためである。

以下に児童たちの気付きや反応に着目して参与観察したアウトリーチ当日 (2018 年 1 月 15 日) の一例をあげる。

小学校第 4 学年 90 名 (1 クラス約 30 名) 45 分× 3 クラス

○演奏者人数/楽器/場所

・ 1 人/ピアノ/音楽室 (ピアノを教室前に配置し、児童は机を囲むように椅子に座る)

○プログラム

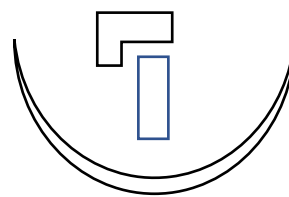
・ 2 曲 (うち 1 曲はワークショップを含む) / 別プログラム 1 曲

1. きらきら星 (アレンジ 木下牧子)

2. ムソルグスキー作曲《展覧会の絵》より (ワークショップも兼ねる。)

+α スイミー (朗読と絵本の投影に合わせて、ドビュッシー作曲《ベルガマスク組曲》より「前奏曲」の演奏)

教室内の簡略配置図



○実施のねらい

・「プロのピアニストの演奏にふれてクラシック音楽に親しむと共に、音楽から想像を膨らませて自己表現をする。また、『展覧会の絵』による折り紙ワークショップを通して、クラスのそして 4 年生全体の一つの作品を作り、音楽を聴く楽しさを感じてもらう。」

○始まるまで

児童は、あいさつしながら静かに音楽室に入ってきた。

○始め方

音楽科教諭がアウトリーチコンサートやワークショップについて軽く説明していた。

説明の中で音楽科教諭は「じっくり見て、聴いて」と声かけをしていた。

演奏者は、音楽科教諭に紹介され、音楽室に入場し、一言あいさつしてからピアノを弾き始めた。

○プログラムが始まってから（児童）

全員背筋を伸ばし、ピアノに体を向けて、前のめりで集中して聴いている様子であった。

演奏終了後はすぐに拍手をし、ほとんどの児童がニコニコした表情をしていた。

○プログラムが始まってから（演奏者手立て）

説明をしていく中で、「どうしたと思いますか？」や「～知っていますか？」、「わかりますか？」等の確認の声がけがあった。

また、用意してきた文字に対して「なんて書いてありますか」、「みんなで言ってみましょう」、「せーの」と声がけし、意図的に児童に読ませていた。

さらに、折り紙を用いる際には、「折り紙何色があるの？」と問いかけるも、演奏者は事前に色と枚数を把握しており、児童が各々色を口に出していても特に遮ることなく、大体言い終わったところに「14枚もあるんだ～！すごいね～」のような価値付けをする声がけをしていた。

○アウトリーチ中 聴き方 見方

長い説明に対しても真剣に話を聞いている様子であった。

演奏者の声がけや問いに対して活発にかつ礼儀正しく、挙手や発言で反応していた。

演奏者が《展覧会の絵》の「プロムナード」のメロディーを弾いた際には「ああ！」「これか！」「知ってる知ってる！」等の反応があった。また、画家ハルトマンの説明の際に演奏者が「病気で亡くなってしまいます」というと児童たちは「ええ…」のような悲しむ反応をし、その時感じたことに対して素直に反応していた。

曲を聴くときと活動をするときのメリハリがつけられており、曲を弾こうと演奏者が動き出すと児童は話をやめた。

○まとめ

今回のアウトリーチは、ワークショップがメインであった。

本プログラムの流れはキラキラ星→展覧会の絵の説明→断片的に曲（プロムナード3つ分）を聴いて、それぞれの曲に合わせて折り紙を選ぶ→曲を通して鑑賞する（絵画のある曲は絵画を提示し、プロムナードの際には作った折り紙作品を提示）→最後の「キエフの大門」の際に3つの折り紙作品をつなげて、大きな門にして終演。子供たちは終始集中しており、ワークショップにも積極的に取り組んでいた。

折り紙は1つ目はそのまま2つ目3つ目は、台紙の折り紙を選びそこに違う色の折り紙を切り貼りしていく。3クラスそれぞれ違い個性があった。また、どのクラスも担任が参加しておりクラスの雰囲気落ち着いていた。さらに、児童たちが前のめりになったりする様子から、音や説明から何かを受け取ろうという姿勢が感じられ、それは興味や関心につながるのではないかと考える。

上記の観察以外にも、今年度観察してきた他の7つの小学校のアウトリーチで児童たちは、楽器自体に興味を示し、楽器に触れたことがある児童は、自分たちとは違う音色がするプロの演奏を生で聴き、とても興味を示していたように思う。また、演奏者の多くは、児童たちの小さな反応を見逃さず、意見を尊重したり、価値付けしたりする声がけをしていた。そのことから児童たちの満足度が高いのではないかと思う。

さらに、日頃からコミュニケーションを図ることができている音楽科教員との授業とは違い、初めて目にする人の初めての演奏（技術面、楽曲面含む）を目の前にし、緊張の様

子も見受けられる。しかし、常日頃から学んでいる礼儀はもちろんのこと、音楽の聴き方（各学校により方法は様々）、そして知っている知識やその時の感動などをアウトプットする様子から、児童たちにとってかけがえのない時間となっている。実際に本法人のプログラムを数年前に小学校で受け、中学校に進学した生徒に話を聞いてみても、記憶に残っており、それぞれ小学生ながらに感じたことは様々あるようで、その後の音楽活動や、授業などの一場面に生かされている実態もある。

そして、最新のアウトリーチ実施後の児童アンケート⁹では、1293人¹⁰の回答があった。その中で、「今日のコンサートはどうでしたか」の問いに83.4%が「とてもよかった」11.6%が「よかった」と答えた。次に「コンサートを聞いて、今までより音楽が好きになりましたか」の問いに49.7%が「とても好きになった」36.0%が「好きになった」と答えており、子供たちにとっての『いつもの音楽の授業』とは違う『音楽の授業』を体験することができたのではないかということが見て取れる。そのことから、子供たちの気付きや興味の拡がりにより深まる一つの手立てであると言える。

これらのことから、学校の中だけの学びで終わらせないためにも、アウトリーチなどの機会を活用し、音楽の本質的演奏やそこから得ることのできる興味や気付き、学びの意欲につなげていく、多面的なアプローチが今後もより必要であると考えられる。しかしながら、現代の学校において、アウトリーチなどに時間を割くということに否定的な学校や物理的に開催することが難しい現状もあることも課題の一つであるため、各学校の求める水準の高い音楽的知識や教育的知識をもつ、演奏者の育成も必要である。

4.今後の課題と展望

今回、他教科との連携とアウトリーチという二つの側面から、多面的なアプローチを通じた、カリキュラムマネジメントの可能性について概観した。他教科の連携では、教科の学びをより定着させるとともに、次の学習への動機づけも期待できる。また、アウトリーチでは、それまでに学んだことをアウトプットしながら、さらなる学びや新たなことへ気付き、より興味をもつことが期待できる。しかしながらこれらのことは、様々な分野で研究され、様々な校種教科の教員が実践しつつも、社会の変化や学校教員の多忙化などで実際にうまく機会を利用し、活用できている現場はそう多くはないのではないだろうか。

そこで、これからさらに変化、進化していく社会を我々やこれからを担う子供たちが生き抜いていくためにも、学びの深化、学びのつながり・拡がりが必要であると考えられる。その中でも、特に知識や技能だけではない音楽は、その感動を伝えられるのはその感動を知っている者だけである。そのため教員自身が多く音楽に感動し幅広い視野をもつことも必要である。そして、子供たちが人生をより豊かに歩いていくためにも、音楽のよさ美しさを伝えていくためにも、本研究ではさらなる参与観察などを通して、音楽科教育のこれからの寄与できるものとした。

⁹ 事業報告書 2016年（2017年7月発行）より

¹⁰ 2016年度アウトリーチ実施全小学校児童より得た回答人数である。

参考・引用文献

- 井上朋子（2011）「音楽科と図画工作科の横断的プログラムの構築」『音楽教育実践ジャーナル vol. 8 no. 2』 pp. 54-61
- 小島律子（1998）「音楽科と他教科との関わり」『学校音楽教育研究 Vol. 2』 pp. 15-32
- 小島律子（1999）「音楽科と他教科とのかかわり—はじめに」『学校音楽教育研究 Vol. 3』 pp. 21-35
- 小島律子（1999）「音楽科と他教科とのかかわり—IV音楽を中核にした総合的カリキュラム展開の視点」『学校音楽教育研究 Vol. 3』 pp. 21-35
- 原由佳、山浦光雄、清水和、藤森裕治（2016）「音楽と言葉の交響—学級文化の醸成における音楽科と国語科の連携—」『信州大学教育学部 研究論集第9号』 pp. 189-204
- 林睦（2013）「音楽教育におけるアウトリーチを考える —基本的な考え方，歴史的経緯，最近の動向」『音楽教育実践ジャーナル vol. 10 No. 2』 pp. 6-13
- 日吉武（2011）「音楽科教育における道德教育の研究：学習指導要領の検討を通して」『鹿児島大学教育学部研究紀要. 教育科学編 62』 pp. 57-69
- 松下行馬（2016）「子どもの心に残る音楽の授業の要件についての一考察」『音楽教育実践ジャーナル vol. 14』 pp. 68-76
- 山田丈美、都築繁幸（2015）「国語科と音楽科の合科的指導の試み」『中部学院大学・中部学院大学短期大学部 研究紀要第16号』 pp. 79-89
- 吉本宏光（2013）「アウトリーチから始まる日本の未来 —音楽教育にとどまらないインパクトとポテンシャル」『音楽教育実践ジャーナル vol. 10 No. 2』 pp. 14-20
- 文部科学省（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
（学会発表資料）
- 芳賀均「音楽と理系領域の合科的学習の試み—振動数比をもとにした和音の響きを題材として—」日本音楽教育学会第48回大会（於 愛知教育大学、2017年10月22日）